

がんで死ぬ理由

Dr.

和の町医者日記

「がんの基礎知識」シリーズ②

ようやく朝夕が少し涼しくなりました。

さて、私が外来診療の合間に在宅医療に従事するようになって20年が経過しました。その間に800人を超える人を在宅でみとらせていただきました。そのうち、がんで亡くなった方は約6割強です。当院の場合、末期がん在宅療養を始めた方の9割以上は最期まで在宅で過ごされています。

やはりわが家はよほど居心地がいいのでしょうか。一方、がん以外の病気で在宅で診ている方のなかには、急変して入院をしたり、介護疲れから施設に入所されるので、在宅みとりの割合はがんの約半分程度になりま



長尾和宏 (ながお・かずひろ)
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。57歳。

ステージIV―末期がん、ではない

方、がん以外の病気で在宅で診ている方のなかには、急変して入院をしたり、介護疲れから施設に入所されるので、在宅みとりの割合はがんの約半分程度になりま

もまもなく旅立たれて、悔しい思いをしました。そもそも末期がんとは何でしょうか。どんな状態なのでしょう。末期がんとは、がんが

こちら臓器に転移してモリモリと増殖するとともに、全身が徐々に衰弱してくる状態を指します。誤解してはいけないのは、あちこちに転移巣があるだけでは末期がんと言えないことです。たとえば乳がんが全身の骨に転移したまま、ホルモン療法で10年近くも元気に仕事をしていた女性がいました。彼女は骨シンチグラフィを撮ると、全身にがんの転

移だらけでした。しかし、10年近く転移巣はそのまま大きくなかったのです。がん病巣はあちこちに散らばり、それなりの大きさになって、ある時点から休眠モードに入ったのでしょうか。だから彼女は10年近くも生きられた。しかし、ある日から高熱が続き、冬眠していたはずの全身のがんが、なぜか

一斉蜂起したのです。彼女はみるみる衰弱して、在宅医療に移行して2カ月後に穏やかに旅立たれました。10年間の冬眠期間がありながら、たった2カ月間の増殖期間を経て、最期を迎えました。がん細胞から体を弱らせる毒素のようなものが出るの

で、全身が衰弱していきま

す。がん細胞の数が増えるほどその量も増えて、筋肉は衰え、食事は落ち、全身の機能

活用が鍵です。研修医時代、末期がん患者が続々と搬送されてくる「野戦病院」でコマネズミのように働きながら、ひとつの疑問を抱えていました。「なぜ人は末期がんになると死ぬのか?」「もしかしたら末期がんのまま長く過ごす人もいるのではないか」などと想像していました。しかし、末期がんの人はどんなに医療を施してもまもなく旅立たれて、悔しい思いをしました。

スキルス胃がん がん細胞が胃粘膜の下をはうように進む胃がん。比較的若い女性に多い。胃の壁ががんで収縮し、固くなったように見える。胃がんの中でもやや特殊とされており、早期発見が困難で予後は不良とされる。

能が低下します。そんな状態を末期がんといいます。余命が1〜2カ月だと判断する段階です。「ステージIV」という言葉をよく聞きます。「ステージV」はありません。IVとは原発巣から離れた臓器に転移がある状態です。しかしステージIV末期がんではありませ